



『やっと会えた』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本拓也

初回訪問の日、夫を祭る仏壇がでんと置かれていた和室のベッド上に、チヨエさんは休んでおられた。

夫が急逝した時、チヨエさんはまだ30代。治療のため入院していた夫は、直ぐに退院してくるはずだった。しかし、その入院中に脳卒中を発症し、夫は帰らぬ人となった。あまりにも受け入れ難い唐突な別れだった。それでも何とか自分自身にその事実を受け入れさせ、自らを奮い立たせることができたのは、12歳と9歳の2人の娘の存在があったからだ。アルバムを開くと、そこにはチヨエさん手作りのおそろいの服を着ておどけたポーズをとり屈託のない表情で笑う少女時代の娘たちがいた。チヨエさんは、文字通り女手一つ、手塩にかけて娘たちを育てた。苦勞の甲斐あつて娘たちは明るく賢く育ち、それぞれに幸せな家庭を築いた。「私は孝がないから…」と伏し目がちに話されるチヨエさんの部屋には、今にもハラハラと分解してしまいくさな古ぼけた国語辞書があった。それは、夫が愛用していた国語辞書だった。

亡くなる3カ月前、総合病院の眼科を受診した際にたまたま見つかった貧血を精査した結果、進行胃癌と診断されたチヨエさんは、程なくして自ら尊厳死協会に入会する手続きを取り、晴れて会員となった。延命治療はしてくれるなという強い思いがあった。そんなチヨエさんの前に、40年以上も前に亡くなったはずの夫が現れたのは、チヨエさんが亡くなる2週間前の木曜日だった。何十年もずっと想い続けてやっと会えた夫だ。恐れなく感じるはずもなかった。夫への慕わしい感情が溢れた。その翌日から、チヨエさんは自らの葬儀の段取りを含め、この人生の幕を引く本格的な準備を開始した。

「向いつに行かれて、ご主人さんに会われたら、チヨエ、娘たちをよくこんな立派に育ててくれたなあ、ありがと」「ごきつと褒めてもらえますよね」と私が言った、チヨエさんは恥じらうように微笑んだ。夫の話をしている時のチヨエさんは、かつて夫と暮らしていた頃の妻の顔だった。

2度目の訪問の後、次女さんから次のようなメールをいただいた。…前回の訪問で母は先生をとても信頼し、「あの先生なら任せられる。安心した」といきりに言っていました。「考え方がびったり！おんなじだ！」と喜んでいました。医療は進歩し機械設備もどんどん充実する中で、聴診器をあて、患者の切なる訴えを真剣に聞いてくれるお医者様に巡り会ったことは本当に幸せなことです。私たちも安心し、家の中の片付けをしていました。姉が引き出しから新聞の切り抜きを見つけました。興味のある記事を切り取ってためていたようです。その中に先生の2年前の新聞記事があり、驚きました。びつやり母はその

頃から先生に診ていただきたいと思っていました。しかもさらに驚くことにその記事が載っていた新聞の日付は、2年前の母の誕生日でした。母は「ここにあったの？探したのさ」と言っていました。それからというものの繰り返しその記事を私に読んでほしいと言ひ、調子の良い時はひとつひとつの言葉の意味を聞いてきました。そして母に会いにきた人みんなにそのことを説明してほしいと言ひ、「先生が次来るまで何とか頑張ると言っていました。具合が悪い時は特に私にそれを読んでほしいが、あまりにも熱心なのでネットでも先生に関する他の情報も調べ母に教えていました。慈善会便りに先生が書かれた文章も黙って聞き、聞いていると痛みが和らぐと言っていました。今、午前1時を回ったところです。今日は呼吸が今までで一番苦しいと言っています。それでも娘たちを氣遣い大丈夫だから寝なさいと側に寄せません。私は眠れずに、このまま母が先生にこの話を伝える前に逝ってしまつたらどうしようと思ひ、メールアドレスも知らずに文だけ打っています。先生に電話してきていただこうか？」と私が言うと母は「それは大丈夫。頑張るから」と言っていました。私は学生の時は何かと考えの合わない母に反抗し、すまない気持ちがありながらも「家族だから許される」とこの歳まで甘え、素直になれませんでした。感謝の気持ちを日常よく伝える夫のおかげか素直に育つたわが子を見て、自分もこんな風に母に接することができていれば母はどんなに幸せだったかといつも思っています。その気持ちは母に伝わっていたかも知れませんが、言葉に表すことがずっとできずにいました。いつか…と思っていたタイムリミットは迫り、先日、母の日に電話でやっと気持ちを言葉にすることができました。そして、この数日、残り少ない時間を母と過ごすことができ、痛みにも耐えながら凛として頑張る母の生き様を、間近で見、感じ、自宅で看取るこの大切さを実感しています。父を早くに亡くし、女手ひとつで私たち姉妹を育てるのには大変な苦勞があったと思ひます。先生が診察してくださった後は、おかげで痛みも和らいだ母と思ひ出話をしたり、母の大事にしていた物をきれいにしながらそれを使っていた場面にも思い巡らせる時間をゆつたりと楽しみました。母の側にいて母の願ひを形にする環境を整えてくれた姉と、私たち家族の時間を支えてくださった先生に言葉で言い表せないほど深く深く感謝しています。本当にありがとございました。…」

初回訪問の日から数えて10日目の夜、チヨエさんはこの世でなすべき仕事をすべて果たし終え、立派に育て上げた娘たちに見守られる中、愛する夫の元いそいそと旅立って行かれた。あのポロポロの国語辞書は、棺の中に眠るチヨエさんの傍らにそっと置かれた。